

ペルシャ人のサルマ ン

元ゾロアスタ 教徒（半）：キリスト教からイスラ ムへ

:

明:

サルマ ンは 束された 言者と出会い、 かった探求をようやく えます。そして奴 の身分から自由の身となった彼は、 言者に最も近い教友の一人となります。

目:[事 言者ムハンマド彼の教友たちの物](#)

目:[事新改宗者ムスリムの逸 著名人](#)

より: ペルシャ人のサルマ ン

日 7 Feb 2014

集日 17 Feb 2014

その男性は亡くなり、サルマ ンはアムリアに留まりました。ある日、“カルブ族の商人たちが私の元を通りかかりました。” サルマ ンと言います。“私は彼らに言った。‘私をアラビアに れていってくれば、私の牛と羊を差し上げよう。’ 彼らは言った。“よろしい。”

サルマ ンは申し出通りのものを彼らに差し出し、彼らは彼を一 に れて行きました。彼らが（マディ ナ近郊の）ワ ディ アル＝クラ にたどり着いたとき、彼らはユダヤ人たちに彼を奴 として り ばしました。サルマ ンはユダヤ人たちと留まり、彼は（去に から告げられていた）ヤシの木を目にしました。

“私はここが、 から告げられていた 所であることを った。”

ある日、マディ ナのユダヤ人部族のバニ クライザの元にサルマ ンの主人の 兄弟が ね、サルマ ンを彼のユダヤ人の主人から い取りました。

“彼は私をマディナまで連れて行きました。神に誓って！
そこを目にしたとき、が述べていた 所であることが分かりました。

そして神は、かれの使徒（ムハンマド 彼に神の慈悲と祝福あれ）を遣わしました。
彼はマッカに い 留まっていたました。
。私は奴としての仕事に忙しかったため、彼については何も耳にしていませんでしたが、彼はマディナに移り住んで来ました。

（ある日、）私は主人のためにヤシの木に上り、ヤシの の房を取る仕事をしていました。彼の 兄弟が れ、彼（座っていたサルマ ンの主人）の前に立ち止まって言いました。“バニ キラ（キラ族の人々）に いあれ！ 彼らはクバで、今日マッカから到着した 言者と自称する者の周りに集っている！”

私はそれを いたとき激しく震え、主人の上に落っこちるのではないかと恐れた程でした。私は木を降り、こう言いました。‘何の ことを しているのですか！？
何の ことを しているのですか！？’

主人は怒って私を殴り、こう言いました。“この件とお前に何の こがあるというのだ？ さっさと仕事に れ！”

私は言いました。“何も ありません！
ただ、彼の言っていた こを かめたかっただけです。”

その日の夜、私は神の使徒を一目 ようとクバ まで行きました。私はそれまで蓄えていた、ある物を 一に持って行きました。そして彼にこう言いました。“私はあなたが な人物で、（ここでは）よそ者であるあなたのお仲 が困 していることを知りました。私が蓄えてきたものを喜 として提供したいと思います。私はあなたこそが より

もこれにふさわしいとお受けします。”

私は彼に提供しました。彼は教友たちに“食べなさい”と言いましたが、彼自身はそれに手を付けませんでした。私は自分自身に言いました。“これは（言者のしるしの）一つ目だ。”

この言者（神の慈悲と祝福あれ）との出会いの、サルマンはの を行いました。次の会に、言者へり物を持って行きました。

“私はあなたが喜として差し出されたものを食べないことに付きました。それゆえ、これは私からのあなたへの名誉としてのり物です。”

言者はそれを食べ、彼の教友たちにもそうするよう命じました。私は自分自身に言いました。“これで、（言者のしるしは）2つ目だ。”

3度目の出会いにおいて、サルマンは言者（神の慈悲と祝福あれ）がある教友の葬に出席していたアル＝バキウに出向きました。サルマンは言いました。

“私は彼に（「あなたに平安あれ」というイスラムの）挨拶をし、に教わっていた（言者の）封印をるために彼の背に回った。私がそうするのを目にした彼は、私が明されたことをしようとしていたことに付いた。彼は背中をさらけ出したので、私は封印をて、そこにあることをした。私はそれにしがみつき、口づけをしつつ泣き始めた。神の使徒（神の慈悲と祝福あれ）は（が出来るよう）正面に来るよう私に言った。私はあなた、イブン アッバスにした物（彼はここでイブン アッバスに物をっています）を彼にもした。彼（言者）はそれを大に入り、彼の教友たちにも私の物をるよう望んだ。

彼は依然として、主人に所有された身分の奴でした。言者は彼に言いました。“サルマンよ、（あなたの主人と）自由になる契をぶのだ。”

サルマンはそれに、（彼の主人から）自由になるための契を びました。彼が主人と合意に至ったのは、40オンスの金を支払い、300本の新たなヤシの木を植え、それらを 事育てるというものでした。言者は教友たちに言いました。“あなたがたの兄弟を助けるのです。”

彼らはサルマンのため、指定された木々を集めました。言者はサルマンに苗木を植えるための穴を掘るよう命じ、彼は自分の手でそれらすべての苗木を植え付けました。サルマンは言いました。“私の魂がその御手にある御方（神）にかけて。苗木は一本たりとも枯れませんでした。”

サルマンは主人にそれらの木々を差し出しました。それから言者はサルマンに、の卵の大きさの金を手渡し、こう言いました。“サルマンよ、これを受け取るのだ。そして（あなたの主人への）借りを返すのだ。”

サルマンは言いました。“私の借りにして、これはいくら程あるのですか！”

言者は言いました。“受け取るのだ。神はそれをあなたの借りと同等のものとしてくれよう。” [5](#)

私はそれを受け取り、重さを量ると、丁度40オンスありました。サルマンはその金を主人に差し出しました。彼は契の合意事を果たし、放されたのです。

それ以来、サルマンは言者の最も近い教友の一人となりました。

真理の探求

アブ フライラという 大な教友の一人はこう 告しています。

“????????????????????????????????62????????????????????????????????”

“??62?3?”

????????????????????‘????????????????????????????????’

